

# スモモの生産安定に向けて

## 要約

五條吉野地域の果樹農家で栽培が広がりつつあるスモモについて、安定生産に向けた取組を支援した。R2年には部会員全体で約2.9tの出荷が行われ、カキ栽培の新たな補完品目として有望視されている。

## 現状(背景)と課題

- 五條吉野地域では、カキの補完品目として従来からウメが栽培されてきたが、近年では若手生産者を中心にスモモの栽培が増加している。(R2年栽培面積：約3ha)
- 成木化につれて収量は年々増加しているが、苗木の生育不良や枯死、病害虫による被害等が発生しており、対策が求められている。

## 目標

- 生産安定  
(収量0t(H29)→2.9t(R2))
- 苗木の枯死対策技術の確立

## 活動内容

- 指導対象：JAならけん西吉野スモモ部会員(22名)
- 栽培講習会を年2回程度開催し、剪定や施肥、病害虫対策等を啓発した。
- 苗木の枯死対策として、凍害対策技術や連作障害対策技術の現地実証試験を行った。

## 成果

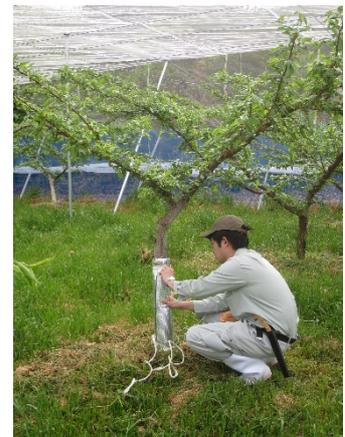
- R2年の収量は2.9tとなり、当初の目標を上回った。
- スモモの防除暦を作成し、講習会で情報提供した。
- 凍害対策資材(アルミ蒸着フィルム)の有効性を確認した。



講習会での情報提供・意見交換

時期	病害虫	薬剤(左欄はRACコード)	濃度	使用時期
1~2月	【冬期の管理】 ・黒斑病にかかった枝はできる限り取り除く ・ワイドによるスモモ斑入り果病の蔓延を防ぐため、剪定に用いるハサミは消毒 ・木枝の切り口や傷口にはトップジンMペーストを塗布する ・霜害対策として、主幹部にわらやアルミ蒸着フィルムを巻く			
2月中下旬	ふくろみ病	M 石灰硫黄合剤 または M トレノックスフロアブル	140倍 500倍	収穫14日前まで
3月上旬 (開花前)	黒斑病	M 10ボルドー412 または M ムツシュボルドーDF	30倍 500倍	萌芽発芽前まで
3月中下旬 (開花直前)	灰星病	2 ロブラル水和剤	1000~1500倍	収穫前日まで
4月上旬 (落葉期)	灰星病	M ベルコート水和剤	1000~2000倍	収穫3日前まで
4月上旬~5月上旬	アブラムシ類	4A エスピラン糖粒水溶液	2000~4000倍	収穫前日まで
4月上旬~5月上旬	黒斑病	下葉より選択して散布する		
5月中旬	黒斑病	41 マイコシルド	2000倍	収穫21日前まで
		または 25 アズレト水和剤	1000倍	収穫30日前まで
		28 サムコルフロアブル10	2500倍	収穫3日前まで
	シシトリスミレ類	または		

作成・配布した防除暦



凍害対策資材の現地実証試験

南部農林振興事務所農業普及課  
担当：農産物ブランド推進係 辻本  
リーディング品目支援事業

## 普及活動のポイント

- ・園地や集荷場を積極的に巡回するとともに、生産者連絡網（SNS）に加入し、最新の情報を収集するよう心掛けた。
- ・果樹の現地試験はすぐに結果が出ないケースが多いが、結果を待ち望んでいる生産者が多いことから、講習会等では試験の内容や経過を随時報告することとした。

## 対象の変化

- ・当初はウメと同じような粗放的な管理を行う生産者が多かったが、「ウメよりも着果しにくい」、「病気にかかりやすい」等を説明し、人工授粉や病害虫防除、鳥獣害対策等の安定生産技術に目を向けるようになってきたと感じている。

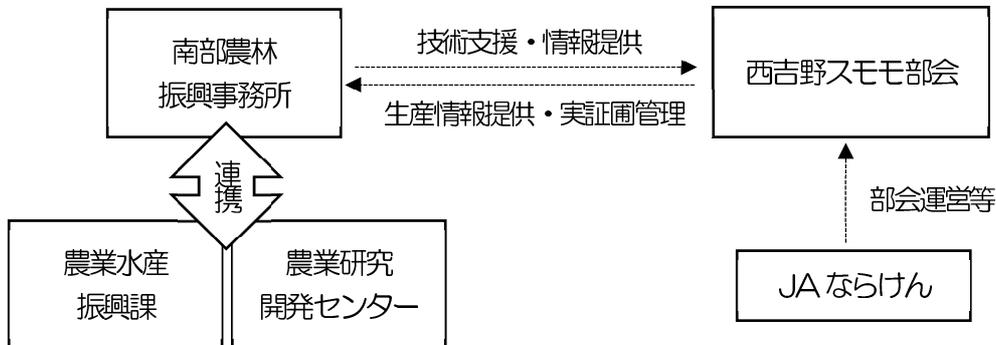
## 対象者からのコメント

- ・スモモは、モモやナシ等の主要果実が多く流通する前に収穫・出荷できることから需要があり、カキ栽培の新たな補完品目として注目している。
- ・苗木の生育不良や枯死については、依然問題となっており、今後も対策技術を検討してほしい。

## これからの活動ビジョン

- ・苗木の生育不良や枯死については、研究機関と連携しながら、現地調査や現地実証試験を引き続き行う。

## 活動体制



## 用語解説

### 凍害

樹体が低温にさらされることにより凍結・枯死する現象。

低温耐性は時期によって変化し、冬から春にかけて気温が上昇すると低温耐性が低下するため、春先のいわゆる「寒の戻り」によって凍害が発生するケースが多い。

### 連作障害（いや地）

モモやウメ、スモモ等のバラ科果樹同士を改植した場合に、植え付けた苗木の生育が抑制される現象。

土壌病害や有毒物質の蓄積、土壌養分の過不足等が原因と考えられている。